

氏名	金 川 修 身
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学位授与番号	甲 第 464 号
学位授与の日付	昭和53年 3 月31日
学位授与の要件	医学研究科内科系内科学専攻 (学位規則第 5 条第 1 項該当)
学位論文題目	担癌宿主の免疫能に関する研究 第1編 マウス Foot Rad Reaction におよぼす免疫賦活剤の 影響 第2編 肺癌化学療法症例における宿主免疫能の検討
論文審査委員	教授 大藤 眞 教授 長島秀夫 教授 折田薫三

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

第1編：非特異的免疫賦活剤が担癌宿主の腫瘍に対する特異的な反応に対してどのような影響を示すかを明らかにするため、 C_3H/He マウスと同系の腫瘍であるMH-134を用い、担癌マウスのMH-134に対するFoot Rad Reactionを指標として、OK-432, Levamisole, PS-Kの宿主の反応に及ぼす影響を検討した。3剤とも腫瘍移植前に投与した場合は何らの影響を及ぼさないが、腫瘍移植後の投与ではPS-K投与群に明らかな反応の増強が認められた。cyclophosphamideによる反応の抑制条件でこれらの薬剤を投与した場合に抑制の回復が認められたが、特にPS-K, OK-432をcyclophosphamide処理後に投与した場合は正常群と同程度にまで回復した。carragheenanによる抑制には3剤とも反応の増強効果を示さず、Levamisole, OK-432投与群では抑制の促進が認められた。この結果、これらの免疫賦活剤を化学療法と併用することにより担癌宿主の腫瘍に対する特異的な免疫反応の化学療法剤による抑制に対して拮抗する作用を有することが示された。

第2編：癌化学療法と宿主要因との関わり合いを明らかにするために、原発性肺癌患者50例に対して行われた間歇的多剤併用療法とリンパ球数、T.Bリンパ球数、PHAによるin vitroリンパ球芽球化、PPDおよびPHA皮フ反応等の免疫能を中心とした宿主要因との関連について検討した。1コースの化学療法では、皮フ反応には有意の変動はなく、リンパ球数、T.Bリンパ球数、in vitro芽球反応も一時的な低下を示すが次の治療前にはもとの状態にまで回復することが示された。化学療法の近接効果と宿主要因との関連は見いだせなかったが、化学療法有効例においては、これらの免疫反応が不変もしくは好ましい方向への変化を示す症例

が多いことが示された。また患者の生存期間とこれら宿主要因の間では、治療前の performance status と P H A 皮フ反応に生存期間との相関が認められた。この結果、間歇的化学療法は患者の免疫能の低下を生じて一過性でありその休薬期間中にもとの状態にまで回復するという利点が生された。また有効な化学療法であれば、化学療法単独でも患者の免疫能の改善を示しうということを示唆している。

論文審査の結果の要旨

本研究は担癌宿主の免疫能に関して実験的ならびに臨床的に研究したものであるが、従来十分確立されていなかった非特異的免疫賦活剤ならびに化学療法剤の担癌宿主の免疫機能に及ぼす影響について重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。